

悔いの残らない人生を

活動テーマは「環境に優しく」

「人と人とのつながりを大切にしよう」

第二回 チャンスを見逃さない、

今を精一杯生きること

「田毎の月棚田保存同好会」

私達が活動している棚田は、千曲市八幡地籍 通称「姨捨」地区にあり、冠着山（おぼすて伝説のモデルになった姨捨山）から続く斜面に、大小、不揃いな形の田んぼが並び、棚田の数は約一、八〇〇枚、二五ヘクタールにもなります。

月夜にはそれぞれの田に名月が浮かび上がることから、「田毎の月」として、松尾芭蕉や小林一茶など多くの俳人の題材にもなった「名月の里」として知られた景勝地です。今ではこの景勝地を保存しようとして、千曲市の「棚田貸しませ制度」のオーナー、地元農家や私達などの市民グループにより保存活動が行われています。

この棚田の景勝地は、日本の棚田百選にも選ばれたほか、松本と長野間を走る

JR篠ノ井線の姨捨駅の下に広がり、長野市街地を遠くに望み、眼下に広がる善光寺平や蛇行する千曲川が一望できるすばらしい眺めで、日本三大車窓にも選ばれた地でもあります。

私達の「田毎の月棚田保存同好会」が発足した一九九四年頃には、耕作者の高齢化などで手間のかかる米づくりを止める農家が増え、放置された棚田が目立つようになり、ひどい所は山林になってしまっているところもありました。

こうした荒廃した棚田を何とか元に戻し、すばらしい景観を残そうと県の職員を中心に賛同者を募り、先ず七人の有志が集まりました。まさに「七人の侍」が、湿地帯で耕作放棄された田んぼ一枚を更埴市の斡旋で借り受け、米づくりをはじめました。



割田 俊明

長野県総務部職員課
企画幹兼課長補佐兼厚生係長

【わりた としあき】昭和28年生まれ。平成元年職員課に異動となり、H2年地方公務員等ライフプラン協会設立時ライフプランを担当し、「46歳対象のライフプランセミナー」「50歳の夫婦参加の人生エンジョイセミナー」などのセミナーを企画。平成14年財団法人長野県職員互助会専務理事就任。退職期ライフプランセミナーを確立。平成20年度3度目の職員課勤務となり現在に至る。

メンバーには、あまり経験のない者が多かったのですが、会員の農業改良普及員や米づくりの経験のある会員、地元農家の指導などを受け、見よう見まねで作りからすべての作業を自分達の手で行う米づくりをはじめました。

活動が始まってから三年後、私にも誘いの声がかかり、実家で米づくりをしていた経験もあり、少しは役に立つのではないかとメンバーに入りました。

私が入った頃には、会員も十数名にまで増えていましたが経験者はまだ少なく、曲がりくねった田んぼの端から端まで紐を張り、みんなが横一列に並び号令と同時に苗を植える。手の早い人、遅い人、まっすぐ植えられない人など、「またかよ、早く植えろよ！曲がっているよ！」と大きい声が飛び交う。喧嘩しているように



大勢で田植えをすれば楽しい (左)
横一列に並んで子供達も応援 (右)

みえるがそうではない、冗談を言いながら楽しみながら作業を進める。大勢で作業すれば、つらい作業も楽しくなる。善光寺平を望むこんな景観の良い棚田でこんなに楽しく米づくりができるなんて。秋には美味しいご飯が食べられる。美味しい米づくりには欠かせない水は、冠着山を水源としたため池から引いてきていて、すごく美味いと評判です。

今では会員は県職員、OB、民間の会社員、中には東京、埼玉、岐阜など県外の会員なども加わり総勢三〇名までに増え、田んぼの数も五〇枚、約五〇アールにもなりました。棚田は、田んぼの面積よりも土手の面積のほうが多く、急傾斜での草刈作業もかなりの重労働ですが、秋には美味しいご飯が食べられることを思い浮かべながら頑張って作業をしています。

近所で田んぼをやっている地元の老夫婦も、楽しそうに作業している私達に、「ひとりふたりでこの棚田を維持していくのは大変、もう限界」と、是非会に入らせてもらっていつしよに米づくりをしたいと、メンバーに入りました。

米づくりを始めた頃、地元の人たちは、「いつまで続くかな? そのうちいやになって止めてしまうのでは」と思っていたようですが、今では、私達の活動がきっかけとなり、千曲市役所が荒廃した棚田を整備し、棚田保存のための「棚田貸しします

制度」を始め今年で二四年目になりましたが、今では県外からもオーナーの方や棚田を撮影する写真家も大勢訪れ、賑やかにになりました。

オーナー田の管理等を行う地元農家の方で組織する「名月会」の皆さんとは良き田んぼ仲間となり、毎年交流会も行っています。昨年、千曲市民による棚田保存グループも新たに発足するなど、市民参加の棚田保存活動が活発に行われるようになりました。

仕事を忘れ、こんな景色のいいところで、大勢の仲間と愉快地に楽しく汗を流し、秋には採れたての新米を炊いて家族といっしょに美味しく食べられることの喜びと、いつもおむすびを握り、笑顔で田んぼへ送り出してくれる妻に感謝したいと思います。

旧戸隠村棚田地区のブルーベリーづくり

七年前、県庁に勤めていた頃、馴染みのすし屋のおやじさんから頼まれ事がありました。

それは、棚地域でタバコの原料となるタバコの葉の生産をしている農家の方などから、「年を取ってきて体も動かなくなりタバコの葉を作るのも大変。もうじき止めることになり、畑も荒れてしまう」、「最近ブルーベリーを作る農家が多くなってきたようにだが、手間のあまりかからないブルーベリー栽培を行い、ブルーベリー採

りツアーなどでこの集落が元気になるようにしたい。技術指導をしてくれる人がほしい」とのことでした。

私は早速、県の農業改良普及員を紹介し、休日、地区の公民館で農家の方などを集めた説明会を開き、二〇数名の方が参加しました。

普及員の話に真剣に耳を傾けるうち、住民の中から「よしやってみよう!」との声、住民が立ち上がり、会を結成。私もメンバーに入り、総勢一二人で会員の畑を借り、ブルーベリーづくりを始めて、早いもので今年で七年目となりました。今では木も一五〇本を超えるまでになり、木の丈も背丈以上に生長、収穫量はどんどん増えてきました。雪の多いこの地域での栽培は枝折れなど管理が大変ですが、木がすくすく伸び、実も毎年増え、子どもが成長するかのようで将来が楽しみです。梅雨が明ける頃が収穫の最盛期。毎年年初収穫の時には採れたての実をたっぷり大きな鍋に入れ、砂糖などを加え即席ジャムを作る。お椀に入れた白いヨーグルトが見えなくなるほど、出来たてのジャムをたっぷりかけ食べる。最高の贅沢、一年の苦労が飛んでしまうそんな実感! 今では畑のある小さな集落で、県の林務部職員の応援を得て間伐の手伝いや、私のお付き合ひのある落語の師匠に協力をいただき、地区の公民館で落語会も開いて交流をしています。



ブルーベリー畑で住民の方と (右)
豊かに育ったブルーベリーの実 (上)

どうせこの地に生まれ、この地で終えるのなら、大いに人生を楽しまう。こうした交流を通して地域の皆さんが元気になる、また皆さんから元気をもらう、こうした人と人との繋がり、交流を私は大切にしています。

戸隠豊岡地区での野菜作り

ブルーベリー作りのきっかけとなったずし屋のおやじさんの紹介で戸隠高原に約一五アールの畑を借り、千曲市の田毎の月での米づくりをしている県職員や「七日会」のメンバーで野菜づくりを始めました。

栽培しているのは、ジャガイモ、とうもろこし、地大根(そばの葉味にもなる辛味大根)、野沢菜など数種類、標高約九〇〇メートルの高原で採れる野菜はとても美味しいです。

収穫直前に熊、サル、貉^{むじな}などによる重なる被害に一度は野菜づくりを諦めようと思いましたが、昨年から電気柵を導入し被害も減り、地主さんの指導を受けながら、野菜作りも段々様になってきました。色々な野菜をいっぱい作って、自慢話をしながら親しい人に配るのを楽しみにしています。仲間と体の続く限り野菜づくりを続けたいと思います。

妻には泥んこになった作業服の洗濯をさせるばかり。でも、苦労して作った野菜を持ち帰ってくるのを、家族で楽しみに待っていてくれます。

NASL地球環境フォーラム

一九九八年長野で冬季オリンピックが開催されました。その四年前はノルウェーのリレハンメルで開催され、リレハンメルでは環境にやさしいオリンピックを基本理念に行われました。長野オリンピックでも環境にやさしいオリンピックを開催してほしいというリレハンメル市長の親書を、民間グループに託し、犬ぞりなどの方法で一九九七年九月、無事長野市長に届けられました。

毎日新聞の長野支局長を務めた倉嶋康氏。冒険家としても知られ、記者だったころ、竹製のいかだでルソン島から日本の間を三四日間で黒潮の流れに乗って漂流冒険に成功した人物です。いかだでの漂流に成功して一〇年目となる一九八七年に「自分の時間と、自分のお金で、つかい無駄をしよう」と仲間呼びかけ、皆の関心を一つにできる対象が必要と、「風揚げ」をテーマに、「人生キリキリ働いて

いるばかりではやがてパンクしてしまう、ガス抜きをしなくては」と隊を結成した。その倉嶋氏が結成した冒険グループの名は「飛天隊」、私も加わっています。「手づくりの海外での風揚げ旅行をして

いるうちに、皆がすっかり忘れていた子供心を取り戻し、心の底からはしゃぎ回る。世界にはたくさん民族が住み、私達と同じ感情をもち、平和に暮らすことを心

から願い、数千年の歴史を築き上げた文化を持つ誇り高く暮らす人々がいることがわかりました」と倉嶋隊長が言います。

こうした自然の中に飛び込み、様々な民族との交流をしている「飛天隊」をみて、長野オリンピック開催都市である長野市の塚田市長(当時)から隊長である倉嶋氏に、次期(二〇〇二年)冬季オリンピック開催都市である米国ソルトレーク市長に親書を届けてほしいと要請がありました。

考えに考え抜いた末、市長や関係各界からの要請や支援を受け、「飛天隊」のメンバーを中心に倉嶋氏を団長とした「NASL国際環境使節団」を一九九七年五月に結成し、親書を運ぶ役を引き受けることとしました。

親書には、「平和と友好の祭典の実現」、「美しく豊かな自然との共存」、「子ども達の参加」、「ふれあいと感動」という長野冬季オリンピック・パラリンピックの基本理念をソルトレークオリンピックでも実現してほしいという長野市長のメッセージが書き込まれていました。また、その親書を化石燃料を使わない環境に配慮した方法、すなわち「徒歩、自転車、帆船」という人と自然の力だけの輸送手段により届けるという、まさに危険と背中合わせの大冒険に近い計画への挑戦でした。

国内での自転車による苦しい訓練を重ね、一九九八年三月一二日、市長、オリンピック関係者、市民など数百人の方



グリーンステーション（自転車の配置場所）への出動を待つ「みどりの自転車」(左)
伊勢市への遠征で伊勢自転車愛好会と交流（環境都市を目指す伊勢市長もいっしょに走る）(右)

に見送られパラリンピック選手村を出発、失敗は許されぬ、例え最後の一人になっても親書を届けるという重大な任務を背負って三年にも及ぶ壮大な計画、大冒険がスタートしました。

◎第一ステージ（一九九八年）

長野から静岡県清水港まで徒歩と自転車、清水港からお台場までヨットで。

◎第二ステージ（一九九九年）

お台場から商船大学の航海練習用帆船

「海王丸」に隊員五名が乗り込み、約一ヶ月かけてサンフランシスコへ（天候にも恵まれ、完全帆走の新記録樹立）

◎第三ステージ（二〇〇〇年）

サンフランシスコから隊員一三人を四班に分けリレーしながら、急峻なシエラネバダ山脈を越え、灼熱のネバダ砂漠など過酷な大地を四台の自転車で約二、四〇

kmを約四〇日かけてソルトレーク市へ

二〇〇〇年七月二三日、最終到達地ソルトレーク市内へ入る途中、アンダーソン市長、塚田長野市長や市民など大勢の市民が自転車で出迎え、パトカーが先導するなにかいっしょに走り、無事市庁舎に到着。一人のけが人もなく無事重要な任務を果たすことが出来ました。化石燃料を使わない手段、徒歩、自転車、ヨット、帆船により長野から総走行距離およそ一万三、三〇〇km。三年間の長い遠征が終りました。

私も国内とアメリカ大陸を最後の四班

の班長として背中に親書を背負い走り、団長とともにアンダーソン市長に届けるという生涯私にとって一番であろう名誉な使命をいただき、無事責務を果たすことができました。

ノルウェーから始まった市民グループによるオリンピック親書のリレーは、ソルトレークからイタリアのトリノへも引き継がれています。来年はカナダのバンクーバーでのオリンピックです。

ソルトレーク到着後、アンダーソン市長と倉嶋団長率いる「NASL」との間で大きな約束をしました。それは、自転車での親書の搬送を機に、地球の温暖化現象を少しでも食い止めるため、ほんの小さな運動だけどアメリカ、日本で化石燃料を使わないで走る自転車の普及を図ることでした。

帰国後、NASL国際環境使節団を解散、ソルトレーク市長との約束を守るため、アメリカ遠征に参加した使節団の仲間「NASL（ナッスル）地球環境フォーラム」を設立。（NASLは使節団のときは、NAはナガノ、SLはソルトレークの意味、フォーラムのNはネイチャー、Aはエア、Sはシー、Lはランドの意味）

市民から不用となった自転車を譲り受け整備し、緑に塗った自転車を市民共用の自転車として無料提供して利用してもらい、「みどりの自転車」の運動を長野市及び大町市で展開しています。また、

三重県伊勢市で同じく自転車の普及活動をしている市民グループなど多くの市民と交流を毎年行っています。

少しでも多くの人に自転車に乗ってもらう運動、「六K運動」（健康、交通、環境、観光、経済、交流）をこれからも続けたい。「環境」はほんの小さな取り組みであっても、自分にできること、世界の人たちが今から始めないと手遅れになります。未来の子ども達のために、美しい地球を守るために！

私の様々な活動を紹介させていただきましたが、活動の共通のテーマは「環境に優しく」と、「人と人とのつながりを大切にしよう」です。

人生ひとりでは生きられない。これからも家族、気の合う仲間、自分が住む地域の皆さんなど多くの人に支えられ、また支えて生きていくことになりました。

せつかくもらった命、楽しく充実した、悔いのない人生を、今を精一杯生きること。そして、未来の子ども達のためにすばらしい地球、環境を残すことが大切ではないかと私は思います。

皆さんも苦しいこと、悲しいこと、つらいこともあるかと思いますが、前向きに人生を楽しんでみてはどうでしょうか。そんな人生、チャンスを見逃さない人生、皆のために出来ることがあったら今直ぐに行動を起こしましょう。（終わり）